

大月にも空襲があった

深澤 眞(高26回)

昭和20年(1945年)8月13日。満州事変より足かけ15年にわたって続いたアジア太平洋戦争が日本の無条件降伏という形で終わるわずか二日前私たちの住む町大月がアメリカ軍の空襲を受けた。

なぜ大月は空襲を受けたのであろうか。多くの人が疑問を持つ。山に挟まれたこんな小さな町がどうして狙われたのだろうか。

マリアナを基地としたB29は京浜方面を空襲する際には、富士山を目標に駿河湾より進入し、桂川沿いに東進して大月上空を通過して爆撃を行った。コース変更点にあたる大月の地理には詳しく、眼下に見える道路や鉄道の合流点に栄える市街地が交通の要衝として政治的・経済的にも重要な地点であるという認識はあったはずである。さらに、この狭く小さな町には、大きな構造物がひしめいていた。線路の北側には能登精機(現大月東中学校)、興亜航空(現興和コンクリート跡地)、大月産業(現住宅地と大月倉庫)があり、南側には都留中学校(現都留高等学校)、大月東国民学校(現大月東小学校)、都留高等女学校(現大月短期大学)があり、市街地の東のはずれには1908年に竣工した日本最初の長距離大容量送電を果たした駒橋水力発電所、そして町の南側にそびえる林宝山の裏側には発電所に引き込む水路がある。また軍事施設としては、能登精機の西対岸の美堂(現みどう団地)には陸軍電波探知所があり、都留中学校の西対岸の結び山には陸軍防空監視哨があった。

当時の日本の工場では何らかの形で兵器に関わるものを生産し、また学校も校舎の一部が軍需工場の一部として使われ「学校工場」と呼ばれていた。アメリカ軍にとってもこのことは周知の事実で、当然、これらの大きな構造物が軍需工場であると認識されれば攻撃されることになる。

また、発電所等は戦略上の重要な攻撃目標であり、それに加えて水路を戦闘機を引き出すための誘導路、そして所々にあるトンネルは戦闘機を隠す掩体壕に見えたのかもしれない。林宝山に数十発の爆弾が投下されたという事実が、その可能性を強める。

これらのことにより、戦略上攻撃すべき都市としてリストに載せられていた可能性が高く、空襲を受けるべくして受けたのではないかと考えられていた。しかしながら、B29の攻撃目標として作成された都市リストには大月の地名はなく、また、「空襲目標情報地域調査」には県内の発電所の一つとして駒橋発電所だけが記載されているだけだった。アメリカ軍にとって、大月は、リストアップされるほどの戦略上重要な都市ではなかったということである。

では、リストアップされていないのに、なぜ空襲されたのだろうか。

その理由は、艦載機であるグラマンの母艦が所属するアメリカ海軍機動部隊の「航空機戦闘報告書」に書かれていた。これによると、「大月空襲」を行ったのは、第38機動部隊に属する3つの空母から発進した合同部隊であり、当初の目標(primary target)であった川崎の東京芝浦電気が雲に閉ざされていたために投弾できなかったため、どこか他に爆弾を投下できる場所を求めて雲上をさまよった末に、たまたま雲の隙間から見えた工場群とダムを攻撃することにしたと記されている。

その雲の隙間から見えた場所こそが大月町であったのである。

つまり、爆弾を落とす場所は、それらしき目標物がある所だったらどこでもよかったのである。確かに、ダムや大きな構造物は、彼らを惹きつける要因だったかもしれないが、たまたま大月町が雲間から見えたために、「捨てる」も同然に爆弾が投下され、たくさんの人が亡くなるこの空襲が行われたのである。

もしも、この日、この時間、大月が雲に覆われていたら、おそらく大月は空襲を受けることはなかったろう。

さらに、「大月空襲」前日の8月12日には「国体護持」のみを条件としてポツダム宣言を受諾するとの日本側の提案に対して、あくまでも無条件降伏を要求する連合国側から天皇の地位及び権限についての回答があった。天皇及び外務省は連合国側の示す通りで受諾の意を決めていたのだが、陸海軍ともに「国体護持」に固執し、政府としての意見がまとまらず、時間を浪費している。このことは、「航空機戦闘報告書」にも、出撃前に中止命令と、出撃命令があわただしく交互に出されたとの記載が見られる。

ここで、もう一つの「もしも」が加わる。

もしも、統帥部が「国体護持」に固執せず、あるいは天皇が「聖断」を下し、日本が12日にポツダム宣言を受諾していれば、おそらく大月は空襲を受けることはなかったろうにと。

わずか終戦二日前。人の手の及ばない気象条件と、軍部を中心とした保身をはかるために遅れた判断の二つが重なり、大月への空襲が行われた。どちらか一方の「もしも」が現実にあったら、誰一人も戦災による犠牲者を出すことなく終戦を迎えることになっただろう。この事実には大きなやるせなさを感じる。

既に64年を経過し、空襲を体験した大半の人は鬼籍に入り、町並みはその跡すら残していない。記憶はますます風化し、そして記録さえも曖昧のうちに片隅に追いやられ、過去のものとして葬り去られそうな感がする。

「大月空襲」は多くの尊い人命を奪った不幸な出来事である。不幸な出来事はそのまま風化し、このまま忘れ去られたほうがいいのかもわからない。しかし、「戦争」を考えるにあたって、この不幸な出来事は、身近で貴重な財産となる。負の財産である「大月空襲」を忘れ去るのではなく、次代に「戦争」と「平和」を考えるための正の財産として伝え、戦争は尊い命を奪う愚かな行為であることを、「大月空襲」を通してともに考えることこそ、その悲惨な状況の中での死に対し「平和の礎」としての意義を与え弔うことになると同時に、われわれが再び過ちを繰り返さないことにつながるのだと思う。